

# 二強<sup>て</sup>一サガ<sub>10</sub>

N E W S A G A

阿部正行  
Abe Masayuki



カイルの幼馴染で、  
女の子に目がない  
ムードメーカー。

**セラン**

**ルイーザ**

「不死」の特性を持つ  
前魔王。人族との  
融和政策を掲げている。

**ユーリガ**

ルイーザに忠誠を誓う魔族。  
カイル達と奇妙な縁で  
結ばれている。

ジルグス王国の美しき王女。  
逝去した父に代わって  
国を取り仕切る。

**ミレーナ**

**サキラ**

グローリアス  
『輝かしき』の名を持つ  
スーラ聖王国の聖王女。

主人公の魔法剣士。  
一度魔王を倒したが、  
真紅の宝石の力で過去に  
戻り、再び冒険を始める。

**カイル**

**リーゼ**

おさなしみ  
カイルの幼馴染。  
格闘の才能があり、  
その腕前はかなりのもの。

**シルドニア**

マジックキング  
伝説の『魔法王』が  
自分の人格や知識の一部を  
複写した魔剣の精神体。

美しきエルフの精霊使い。  
カイルの村を訪れ、  
なし崩し的に仲間になる。

**ウルザ**

**ミナギ**

暗殺をはじめとする闇の技術を  
受け継ぐ「シノビ」一族出身の美女。

主な登場人物  
Main Characters

有史以来、人族と魔族が争う大陸ロインダース。

穏健派だった魔族の王ルイーザによってここ三百年保たれていた仮初の平和が終わり、新たに即位した魔王による、後に『大侵略』と呼ばれる魔族の総攻撃が始まって半年。まだ、戦いは続いていた。

武器や防具がぶつかり合う金属音に、怒号や怨嗟、断末魔の叫びが絶えず木霊する、血煙漂う戦場。人族領と魔族領の境にあるこの平原では、両軍を合わせて数万に上る兵が入り乱れている。

人族側は、人間だけではなくドワーフやエルフ、果ては獣人やリザードマンといった少数種族までもが参加する混成軍だ。

対する魔族の軍は、ゴブリンやオークといった半魔族と呼ばれる種族がほとんどだった。

ゴブリンは醜い小鬼、オークは豚の頭を持った人といった形状で、平均的な人族兵と実力にさほど差はない。だが、いずれも生命力が高い上にとにかく数が多く、人族の兵に比して倍近かった。

本来なら数が戦況を支配するものの、人族側は装備や練度、統率の面で大きく勝っており、全体

としてはむしろ有利に戦いを進めていた。

人間の兵が剣と盾を構えてオークの突進を押さえ込んで防いだかと思えば、ドワーフが戦斧を振るって斬り込んでいき、エルフの精霊使いが火の精霊で援護する。そうして敵が乱れたところに敏捷な獣人達が側面から襲い掛かる。

エルフとドワーフの間ほどではないにしろ、人族は全体的に種族同士の仲が良いとは言えない。それでも、この戦場においては、多少拙いながらもそれぞれの特性を生かした連携が取れていた。勿論、ここに至るまでには様々な紆余曲折があったのだが。

対して魔族側は、数に任せた力押しばかりで、連携はほぼ皆無。装備もその多くが人族から鹵獲したものと思われ、準備という点では完全に人族側が優っていた。

だが、これだけ有利な条件が揃ってようやく、人族側がやや有利といった様相なのだ。もし何の準備もなく戦いになっていれば、どうなっていたか……人族からしてみれば、想像するだに恐ろしいことだった。

ともかく、今回の戦いも人族側が押しつつあり、何事もなければこのまま優勢勝利になるだろうと思われた——そう、何事もなければ。

突如として、火山の噴火にも似た衝撃と轟音が響いたかと思うと、噴煙のような砂ぼこりがもうもうと巻き上がる。

近辺の人族兵達が思わずそちらに視線を向けると、砂煙の中からは巨大な人型の影が現れた。

その見上げるほどの巨体もさることながら、何より目を引くのは、あまりにもアンバランスなシルエットだった。

尖って盛り上がった肩に、胴体と同じくらいの太さで身長よりも長く地についてしまう両の腕。先ほどの噴火のような衝撃は、この腕で地面を殴りつけた結果生じたものであり、その跡には爆心地と見紛う円形の穴が開いている。

巨体の魔族は人族の軍に突っ込んでいき、巨腕を無造作に、しかし凄まじい勢いで振り回す。

ひと振りで十人単位が紙屑の如く吹き飛ばされる様は、まさに暴威。意思を持った災害が人族の兵を蹂躪していく。

無論抵抗は激しく、兵達は手にした刃で斬りかかろうとするが、でたらめに振り回しているとは思えない巨腕をかくぐくすることはできなかった。

ならばと腕そのものに狙いを定めても、とてつもなく頑強でいくら斬りつけようが傷つかないどころか、剣の方が破損するばかりだ。

いわんや弓矢などの飛び道具が効くはずもなく、火炎の魔法は僅かに焦げ目を付けるにとどまり、進撃を止められない。

これこそ、ゴブリン達のような半魔族とは違う、人族の宿敵たる本物の魔族なのだった。そのあまりの強さは局地的ながらも戦局を変え始め、それは次第に戦場全体へと波及していく。

これが魔族の恐ろしいところである。数が支配するのが戦場の常識だというのに、個人で戦局を

変えてしまう実力を持っているのだ。

先ほどまでの優勢から一転し、人族側に動揺が広がりつつある最中、近くにまた新たな魔族が現れた。

こちらは先ほどのものに輪をかけて異形で、背面から巨大な針——いや、もはや剣と言ってもいいくらいに鋭い刃物が無数に生えていた。強いて例えるならば、人間大の針鼠である。

それは、本当に針鼠のように丸まって刃だらけの球体と化したかと思うと、回転しながら突進を開始する。

転がっているだけだというのに、人間どころか獣の全速力をはるかに超えた速さに達した新手の魔族は、容易く相手の防具を貫き斬り刻んでいく。反撃は体を覆う刃に阻まれ、何よりその速さについていけず、人族の兵に為す術もない。

更にもう一人、魔族が現れた。しかし、誰もその姿を見ることはできない。何故なら、身体の大半が地の下に隠れているからだ。

見えるのは、腕。地面から突き出た、鋭く分厚い鉤爪の付いた腕だけだった。

ドワーフ兵達の中央に突如現れた、人よりも獣に近いその腕は、甲冑を易々と貫いて命を奪った後、現れたときと同じように突如として消える。

何をされたのか、何が起こったのか解らないでいると、すぐ側にまた現れて同じように命を奪っていく。

他の二人とは違い、いつどこから襲われるか解らないその恐怖は瞬く間に兵達の間で伝染し、高い練度で統率されていた陣形が乱れ始める。

三百年前の大戦では、魔族は一人で人族の兵千人に匹敵すると言われていた。

多くの人族は、それは大げさに伝わった話であるとして、本気にしていなかった——この戦争が始まるまでは。

両軍合わせて数万を数える戦場において、今まさに僅か三人の魔族が戦局を変えようとしており、このままいけば勝敗がどうなるか解らない流れになりつつある。

しかし、人族にも個人で魔族に対抗できる者はいるのだ。

それは、英雄と呼ばれていた。



蹂躪を続ける魔族達の出現場所から少し離れた場所に、戦場を俯瞰できる小高い丘があり、そこに三つの人影がある。

一人はくすんだ金髪の若者で、口の両端を軽く吊り上げながら、戦場と魔族の動きを目で追っている。

その姿の中で特に目立つのは、手にしている黒剣。これは三百年前の戦いで当時の魔王を英雄ラ

ンドルフが討ち取った際に使用した、伝説の剣だ。

「おーおー、元気に暴れてること。さて、誰がどれに行くか……カイル、お前は どうする？」

そう、金髪の若者——セランは背後に問う。その声は戦場にはそぐわない気楽さで、いつも通り締まりのない表情を浮かべたままだが、ただ一つ、魔族達を観察している眼光だけは鋭い。

「そうだな、俺はあの針鼠にするかな？」

答えたのは、魔法剣士カイルだ。

伝説上の存在に近い古竜ゼウルスの皮を加工した鎧と、古代魔法王国ザールレスが技術の結晶ともいべき魔剣。どちらも神話として後の世に残っておかしくない装備に見合った実力を持つカイルは、まさに英雄と呼ばれるに相応しかった。

「じゃあ俺はあの地面に潜ってる土竜もぐらの方か。いや、オケラって言うべきかな？」

腕だけしか姿を見せない魔族を、セランが顎あごでしゃくる。

「いいのか？ どっちかと言えばああいうのは苦手だろ？」

疑問に思ったカイルが訊いてみる。

人には得手不得手えてふえてがある。カイルに優るとも劣らない強さを持つセランは、正面からの一対一の戦いでこそ最も実力を発揮できるタイプだ。

その条件ならばたとえ格上でも倒せる確率が高いのだが、逆に捌め手からめてで来る相手は少し苦手としている。

「いつまでも食わず嫌いするってのもな。最近はロドグーも食べるようになったんだぞ」

ロドグーとは、栄養豊富ながらクセの強さで好みが分かれる野菜で、セランもまた子供の頃から苦手になっていた。

「……それって単に好みの変化の問題じゃないのか？」

セランの言葉の裏に、ある魔族の影響を感じたカイルだったが、あえてそれ以上は口にしなかった。今この瞬間にも、魔族により兵の命が奪われている。

しかし、二人は焦らない。いつもの軽口を叩き合いつつも、その目は魔族の一挙手一投足を見逃すまいとつぶさに観察していた。

相手についてよく知らぬまま戦うというのも多々あることだが、確実に倒したいならば情報を得るべきなのは当然である。今にしても、即座に突っ込むよりあえて時間をかけて観察した方が結果として味方の被害を減らせる。それをよく解っているのだ。

その観察も終わり、いよいよ動き出そうとしたとき。カイルはこの場にいる三人のうち、会話に加わることのなかった最後の一人に話しかける。

「じゃあ残りの……おっと」

二人のような人間ではなく、直立した人間大の爬虫類といった外見であるリザードマンの戦士バスケスは、カイルに答えることなく駆け始めた——巨腕の魔族を目標に見据えて。

「相変わらずだな」

元々バスケスの口数が多くはないと知っている二人は、軽く笑って見送る。  
そこには、この半年の戦いの中で培<sup>つちか</sup>われた絶対の信頼が込められていた。

「じゃあ俺達も行くか」

「ああ」

カイルとセランもまたそれぞれ、針鼠の魔族と土竜の魔族へと向かっていった。

## 2

今もお暴れ続けている巨腕の魔族めがけて駆けるバスケス。そこまでたどり着くには、味方の  
人族兵の密集地帯を越えていかなければならない。

勿論、密集していると言っても隙間が一切ないわけではないので、その間をすり抜け、時には跳  
躍して踏み越えるなど、最短距離を一直線に駆け抜ける。

何かによってそれを察知したのか、周りの人族兵をなぎ倒していた巨腕の魔族は、向かってくる  
バスケスの方をはじかれたように見る。

そして、ひと目で危険な相手だと悟ったのだろう、反射的に思い切り殴りつける。

しかし、焦ったのかその巨大な腕をもってしても届かない、早すぎるタイミングだ。それ故何か



しら対応する必要がないバスケスは、好機とばかりにそのまま突っ込んでいく。

そんな相手を見て、魔族はにやりと笑い、腕に力を込める。すると、それまでも十分大きかった腕が更に巨大化した。長さは倍以上に伸びて破壊力も増し、当たれば人としての形すら残るかどうか怪しいほどの攻撃となる。

届くはずのなかった間合いに突然の変化を起こした巨腕の魔族は、もはや回避できるはずがないと確信していた。

だがバスケスはそれをものともせず、避けるのではなく更に速度を上げることにより、多少掠ったのみで潜り抜ける。

「ふム、確かに凄まじい破壊力だな……だがそれだけだ」

リザードマン特有の、語尾が少し高くなる口調で、つまらなそうに呟くバスケス。

そして驚愕の表情を浮かべる魔族に肉薄すると、突進の勢いそのままに首筋へと斬り付ける。

「ほウ、反射神経はなかなかだな」

確実に殺った——そう思ったバスケスだったが、魔族は身をよじることで、なんとか致命傷を避けるくらいには回避に成功していた。

「な、何故反応できた!？」

後方に飛んで距離を取った後、巨腕の魔族は驚きを隠せない言葉を漏らす。

バスケスの迷いない動きは、まるで腕が伸長すると知っていたかのようなだった。

「お前の戦いぶりを見ていれば、簡単だろうウ？」

バスケスはバスケスで、なんでそんな当たり前のことを訊くのかと訝しむ。

というのも、彼女は先ほど魔族の戦いぶりを観察する間に、視線や身のこなしから最大の間合いを測り終えていたのだ。

そうして、元の巨腕よりも更に長く伸びる武器の類か何かがあると、簡単に見抜いていた。

これはまさに、これまでの戦いの経験の賜物だった。

「今のが奥の手というのであれば……とっとと終わらせる力」

バスケスの速さからしてみれば、あの長い腕など文字通り無用の長物で、脅威にならない。

今与えてやった傷は深手ではないが決して浅くもないと判断し、一気に勝負をつけるべく、バスケスは駆け出す。

が、その背後から鞭のようにしなった腕が迫る。意表を突かれた形になったバスケスは、それを何とか回避した。

「ほウ……短くすることもできるの力」

意外に思いつつも感心した声を出すバスケス。

どうやらこの魔族の腕は伸縮自在のようで、急速に縮めることにより背後から攻撃したのだった。まだ十分長いが、接近戦でも使えるサイズとなっている。

またバスケスは、相手が先ほど自分の攻撃を、ギリギリとはいえ回避したことも思い出す。

「面白イ！」

好戦的な笑みを浮かべたバスケスが斬りかかり、もはや巨腕ではなくなった魔族が決死の顔で迎え撃つ。

周りの人族や半魔族の兵達は、両者の迫力に気圧されたのか距離をとり、一騎打ちの空間が出来上がった。

シミターと呼ばれる曲刀を自在に操るバスケスの剣技は、儀式的な剣舞と見間違うほど流麗で、戦場であつてさえも敵味方を問わず見惚れるほどだった。

その圧倒的な剣技にからうじて對抗しているものの、最初の負傷も響いているのか、魔族は翻弄され、徐々に、しかし確実に追い詰められていく。

しかしその顔には、決して退かないという決意が浮かんでいた。

「その覚悟よシ！ こちらも本気を出そう！」

隠しきれない喜びの声と共に、バスケスはシミターを振るった。

◇◇◇

一方その頃、セランと戦っていた土中に潜む魔族は、いまにも逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。

つい先ほどまで非常に気分よく人族どもを狩っていたというのに、どうしてこうなったのか、と、自慢の強靱な爪で土を掻き分けて地中を自在に移動し、優れた耳と鼻で地上の様子が手に取るように解る。そうして相手から視認されず、反撃されることもなく一方的に闘ることができるのが、この魔族の能力だった。

自分にとっては人族など所詮狩りの対象でしかなく、戦場はまさに最高の狩場——彼はそう思っていた。

そしてまた、不運な標的を狩ろうと地中から爪を突き出したその瞬間、腕に痛みが走る。

「ぐっ!？」

反射的に腕をひっこめてすぐさまその場を離れる。腕を見れば、それほど深くはないものの、確かに傷がついていた。

「おのれ！ 人族如きが！」

自分が何をされたのか理解した瞬間、怒りで頭が沸騰する。狩りの標的ではないはずの人族に思わぬ反撃を食らったという事実が、実際の傷以上にプライドを傷つけたのだ。

絶対に許せない、切り刻んでやる、と歯ぎしりをする。

忌まわしいことだが、相手は自分の返り血を浴びているはずなので、その匂いをたどれば特定は難しくない。

愚かにも、対象は移動していないようだ。勿論楽には殺さない。まずは足を狙って動きを封じた

後、切り刻んで殺してやる。

地中の魔族は暗い笑みを浮かべながら近づいていき、思い切り腕を地上に突き出し——また痛みを腕をひっこめた。

「ば、馬鹿な!？」

腕を見ると、先ほどと同じくらいの傷がまたついている。

一度ならず二度までも、と更に怒りが加速すると同時に、これは偶然ではないのでは、とも考え始める。

以前にも、反撃を受けたことはあるにはあった。だがそれはあくまで偶然で、決して二度目はなかった。

それでも、今回も偶然が重なっただけだと無理矢理思い込み、三度攻撃する。が、傷が三つに増えただけに終わる。

「こいつ……俺がいつ攻撃するか解るのか!」

自分の最大の優位性が通用しないと理解し、魔族は戦慄する。

土の中を見通せるような何らかの能力を持っているのだとしたら、こいつは自分にとって天敵と言ってもいい。

このまま逃げようかという考えが一瞬頭をよぎるが、ギリギリのところで踏みとどまる。

もし本当に自分の能力が通じないのであれば、そんな相手をこのまま放置しておけないと考えた

からだ。

それに、土の中を自在に動けると言っても、さすがに地上を移動する速度とは比べるまでもなく遅いので、もし追われた場合は逃げきれない。

何より、人族相手——格下相手に逃げるわけにいかず、また自分を傷つけた人族を許せないという歪んだ怒りが、彼の背中を後押しした。

幸いにも、与えられた傷の具合から見て相手も完全に自分を捉えきれてはいないようなので、ある程度の被害を覚悟の上でならば必ず殺せるはず——湧き上がる嫌な予感と、逃げ出したい気持ちとを必死に誤魔化しながら、地中の魔族はそう決意する。

感付かれないようにゆっくりと、我慢比べのように近づいていく。そうして相手の真下に着いたところで、一気に攻撃を加えた。

それも、ただの攻撃ではない。今までは片手のみしか使ってこなかったが、今度は絶妙のタイミングで挟み込むような両手での攻撃だ。

片方を回避されようが、カウンターで攻撃されようが、もう片方で必ず仕留める。

いわば、肉を切らせて骨を断つ作戦。人族相手にここまでやったのだ、必ず殺せる——そう確信していた。

「食いついたか」

魔族の優れた聴覚が、意地の悪そうなそんな呟きを聞き取った。

その意味を理解したのは、両腕が斬り飛ばされたのだと解った後である。

今までとは比べ物にならない激痛に叫び声を上げる中、それを上回る激痛が背中に走る。

確実に殺そうと地上近くまで来たのが仇<sup>あた</sup>になったのか、背中に剣を突き刺されていた。しかも、それだけではない。

「あらよつと！」

釣りでもしているのかと思わせる掛け声と共に、背中に刺さっている剣を引っかけるようにして、地上に引きずり出されてしまった。

「お、そんな姿だったのか……爪からして土竜かなと思ったけど、人間型に近いな」

魔族を引きずり出すことに成功したセランは、ニヤリと剣<sup>けん</sup>呑<sup>の</sup>な笑みを浮かべる。

実際、この魔族の姿は爪が鋭く——既に切り落とされているが——身体は体毛に覆われている以外に、特筆すべき点はなかった。

だが魔族にとってはそんな感想などどうでもよく、凄まじいまでの激情を込めてセランを睨みつける。

「何故だ……何故俺の攻撃が解った!？」

魔族固有の強靱な生命力で何とか立ってはいるが、それでも自分がもはやここまでだと理解していて、だからこそ聞いておきたかったのだ。

「ああ、なんとなくだ」

「な……」

あまりに軽いセランの言い様に、魔族は絶句する。

「何となく解るんだよな、いつ攻撃されるかって」

セランは本来、高い攻撃力を生かして速攻で相手を倒す戦法を得手としていた。しかし、ここ半年間魔族との戦いを繰り返してきた結果、生まれ持った野生の勘とその経験とが合わさって、この先読みの能力を得たのだった。おかげで、こと戦いにおいては高い確度で相手の行動を読めるようになり、戦術の幅が広がったと無邪気に喜んでいる。

「あとは、その攻撃より早く反撃すればいいだけだ」

簡単そうに言うが、それが可能なのは人間の限界を超えた反射神経があつてこそだ。

「だ、だが始めは掠り傷しか……」

「ああ、そりゃわざとだ。お前が相手を鬭<sup>む</sup>り者にする性根の腐った奴だつて解ってたからな。上手く引かなかつてくれて何よりだ」

セランとしては、自分を無視されて他の兵に向かわれたり、逃亡されたりすると厄介だった。完全に罠にはまったことを自覚した魔族は、更にもう一つ、あることに気付いてしまう。

目の前の人間が持つ、三百年前の人族との戦いにおいて当時の魔王を討ち取ったという謂<sup>い</sup>れを持つ、伝説の黒剣に。

「そ、その剣を持っているとは、まさか……貴様がセランか！」

「当ったり」

戦場には不釣り合いな明るいセランの声を聴き、魔族の顔は恐怖と驚愕に歪む。

魔族の間でも、人族の強者については話題に上る。中でも最悪の評判なのがセランであり、その噂は多岐にわたっていて荒唐無稽な内容も多いが、実力の高さを伝えることだけは共通していた。そして今、それが事実だと身をもって知ることになったのだった。

「み、見た目が噂と違う……牙がないし、目が紅くも吊り上がってもいないから、気が付かなかった……」

「一応言っておくが、お前らのとこで伝わってる噂、でたらめだからな……」

魔族に自分の噂を広めた元凶の顔を思い出し、セランは頭が痛くなる。

「ま、終わりにすつか」

止めを刺さんと、セランが容赦なく襲い掛かる。

魔族は絶望する。こんな相手に対しての最善手は逃走することであり、少なくとも無視して他を攻撃すべきだった。だが、もう遅い。

そして、理解する。終わりの時が来たのだと。



カイルが向かったのは、全身が針に覆われた球体のようになっていて、針鼠にも似た魔族の所だ。その針の鋭さは鋼の鎧さえも易々と切り裂くほどで、そんな球体が獣もかくやという速度で転がり回っているのだから、人族側の兵としてはたまったものではない。

「でっかい栗みたいだな」

見たままの感想を漏らしたカイルは、まずはひと当てとばかりに魔族の進路上に立ち塞がる。カイルの実力ならば移動速度そのものは脅威にならず、この刃の塊を冷静に見つめていられる。

だが接近してみても、思いのほか厄介だということが解った。

まず、針の長さがカイルの手にしている剣より長いので攻撃が本体に届かず、それでも無理に当たったならこちらも傷ついてしまう。それから、針の下で皮膚も硬質と見られるので、飛び道具は効きづらそうである。

「攻撃と防御を兼ね備えているな。腹側は脆そうだが、完全に隠している……」

そこまで観察したところで、カイルはほとんど鼻先にまで接近してきた魔族を冷静に回避した。

そしてすれ違いざまに剣を振るい、針を何本か破壊することに成功。魔族はそれでバランスが崩れたのか、少し進んだところで停止する。

「それほど頑丈ではなし……と」

時間はかかるにせよ、これを繰り返していけば——そう思ったが、さすがに甘かったようだ。

「……再生した？」

あの針も魔族の身体の一部ということなのだろう、折れた部分の先がぐにゅぐにゅと伸びていき、元に戻ってしまう。

魔族の方も、針を破壊したカイルを厄介この上ない相手と判断したのか、狙いを定めて襲ってくるようになった。

カイルは突進をギリギリで回避しつつ攻撃、という動きを繰り返す。魔族もあと一步でカイルを倒せると思ったのか、執拗に迫り続ける。

次の瞬間には絶命しているかもしれない戦場という極度の緊張空間で、高速で転がってくる刃の塊のような魔族と対峙中だというのに、カイルはいたって冷静だった。

そんな自宅の居間にいるときとまるで変わらない平静さで相手の観察を続けた結果、あることを確信する。

遠目で見ていた時点で感じた通り、無造作に転がり回っているように見えつつ、さすがに味方まで攻撃しないよう、時折止まって周りの様子を窺うのだ。

カイルに狙いを定めている今も、方向転換をするときには丸まった身体から僅かながら顔を覗かせる。その瞬間を見て、カイルはある策を思いつく。

「ならば、あの手が使えるな……」

これが一对一の戦いであれば、まだしばらく膠着状態が続いたかもしれない。

しかしここは戦場で、敵も多いが味方もいるのだ。カイルは事前に取り決めておいたハンドサイ

ンを遠方へと送り、返事も確認せず行動に移った。

もうこれで幾度目になるのか解らない敵の突進を回避した後、カイルは即座に追いつがる。

避けるので精いっぱいだと思いつ込んでいた魔族は、この動きを予想していなかったようで、対応できない。見事追いついたカイルは、迷うことなく組みついた。

カイルがまとう鎧は相手の針を防ぐことができる。唯一むき出しとなる顔は刃を折った部分に当て、多少は傷ついたものの強引に魔族の動きを止めることに成功する。

押さえつける中、カイルと魔族の目が合った。魔族は驚いてこそいるようだが、焦っている様子は見えない。

破損した針が再生すれば攻撃を再開できるし、現状でもカイルの剣は自分に届かないと解っているからだ。

だがそうなる前に、カイルは横に移動してその場から離れる。

苦勞して動きを止めたというのに、何故離れるのか——魔族がそんな疑問を覚えるのと同時に風を切り裂く鋭い音が聞こえ、目前に矢が飛んでくる。

正確無比な、それこそ針の穴を通すが如き狙撃により、魔族の目に矢が突き刺さった。

凄まじい悲鳴を上げた魔族は、激痛により身体を球体にする余裕もなくなつてのたうち回る。

カイルが体を張って魔族の動きを止めた本当の理由は、遠距離から飛んでくる矢を、直前まで視認させないためだった。

「上手くいった、ありがと」

顔も視認できないほど遠方にいる女弓兵に、カイルは礼の合図を送る。

ゴブリン達半魔族にとつて戦力的にも精神的にも支柱であった、絶対上位の存在である魔族三人が相次いで追い詰められたことにより、魔族側全体に動揺が広がっていく。

その動揺を察したのか、ありえないほど距離の離れた人族軍の後方部隊から、これ以上ない正確さで矢が雨のように降り注いだ。

それを放ったのは、先ほどカイルを助けた女弓兵の背後にいた、闇に近い褐色の肌を持つダークエルフ達。総勢百名ほどと、人族軍の中で占める割合は少ないが、複合弓と呼ばれる大型の弓を使う猛者揃いだ。

魔族側が総崩れになりつつある中、絶好の機を逃さず、止めとばかりの人族側の援軍が到着した。

「来たぞ！『機将部隊』が来てくれたぞ！」

誰かの発した声により、人族軍全体に歓喜が広がっていく。

側面から現れたのは、人に非ざる巨大なモノ。

千年以上前、人族の最盛期と言われた古代魔法王国ザールレス時代に対魔族の主力であった、ゴレムと呼ばれる魔道兵器だ。

人間の数倍の大きさを誇る巨体から繰り出される攻撃の破壊力は凄まじく、しかも痛みも疲れも知らず戦い続けることができるゴレムは、この戦争でも大いに人族の力となっている。

人族側から見ればこの上なく頼もしく、魔族側からしてみれば恐ろしい存在だった。

それが五体現れたことで、先ほどまでとは逆に魔族側が蹂躪され始め、この戦いの趨勢がほぼ決まる。

戦場全体の様子を見て満足したように頷いたカイルは、いまだ激痛にのたうち回っている魔族に止めを刺さんと近づいていく。

『止まれ！ カイル、右じゃ！』

だが、あと少しというところで手に持つ剣から声が聞こえた。その警告通り、視界の右側に白いものが見えたと同時に咄嗟の判断でそちらに向けて剣を振るうが、外れる。

正確には、当たったはずなのに当たっていないのだ。まるで水面でも斬り付けたかのような感触だけを残し、剣はすり抜けていた。

この時点で相手が何者かに気付いたカイルが背後に飛びのくと、その頬を皮一枚、鋭い爪がえぐる。「またお前か……」

カイルは苛立ちの言葉を漏らすと共に顔をゆがめる。この相手には今まで何度も会っており、その度に煮え湯を飲まされているからだ。

全体としては人に近いその姿は、白髪で肌も抜けるように白く、眼だけが紅い。人の間ではアルビノと呼ばれる色素欠乏の状態である。身に着けている衣服も白と、全身白づくめの中、ただ髪の中からからのぞく小さめの角だけは黒いのが印象的だ。

人族の美的感覚からしても美しいと言える姿だが、それはどこか恐怖をはらんだ美だった。

「おや、避けられてしまいましたか。さすがに反応がいいね、カイル君」

血の滴る伸縮自在の己の爪を見ながら、薄く、それでいて嫌な意味で印象に残る笑みを浮かべるこの魔族は『白無』。個の尊称持ちである。

個の尊称とは、魔族の中でも十人といない、実力や功績を認められた者に与えられる呼称だ。

カイルの剣の間合いだというのに、白無は完全に無防備のまま、むしろ斬りかかってこいと言わんばかりの態度で向かい合う。

そしてカイルも斬る隙を窺ってはいるが、行動には移さない。斬りかかっても無意味だと解っているからだ。

「しつこくて鬱陶しい奴だ」

頬に出来た傷を軽く拭いながら、カイルが吐き捨てるように言う。

この白無は本当に厄介な相手だった。間違はなくカイルの方が強いのに、どうしても倒せないのだ。剣で斬ろうが、槍で突こうが、槌で叩こうが、矢で射ろうが……一切の攻撃が通じず、すり抜けてしまいうからである。

勿論、炎や冷氣、魔法による攻撃さえもすり抜け、一切通じない、だというのに白無からは攻撃できるという、反則のような存在だ。

「それはこちらの台詞ですよ……でもこう見えて、君達のこととは評価しているんですよ？ 私が人

族の名前を覚えるなんて、三百年前のランドルフ以来なんですから。だからこそいい加減殺されてほしいんですよ、特に君とセラ君は」

丁寧だが、心の中では徹底的なまでに相手を見下しているのが伝わる口調。

当然カイルがそんな要望に従うはずもなく、睨み合いになったところで、先ほどと同じように正確無比の狙撃が魔族の頭に届く。

しかし、やはりその矢もすり抜けてしてしまふ。

「邪魔ですね、無駄だというのに」

その後も飛んでくる矢はいずれも正確に白無を捉えているが、通用はしない。

具体的な打つ手はない。しかしこのまま何もしないわけにはいかない、そう覚悟を決めたカイルが剣を握る手に力を込め、一步を踏み出そうとしたそのとき――

「カイル！」

聞き慣れた声が響くと共に、向かい合う二人の間に何か投げ込まれ、軽い爆発音が響いて白い煙があたりに立ち込める。

「煙幕か。まったく、煙いこと」

わざとらしく咳ばらいをしながら、視界を奪われた白無は足を止める。

「ミナギか!？」

「魔族達は崩れ始めてるわ！ だからこの場は退いて！」

一瞬だけ迷った後、カイルはミナギの声に従ってその場から離れた。

白無と戦場で顔を合わせるのには、これでもう何度目か。その度に退くしかない現状に、大きく舌打ちするカイル。

「逃げたか……確かに、私はともかく、他の連中はこれ以上は無理そうだ。こちらも退きますか」特に執着を見せることなく踵<sup>かかと</sup>を返し、白無も引き揚げていく。

それが合図になったようで、ここからの魔族側の反応は早かった。全体を指揮する将らしき者は見当たらないにもかかわらず、示し合わせたかのように一斉に退却を始める。

統率されていない分、我先にと逃げて分散するので逆に追撃しづらい。伏兵がいる可能性も考慮して、人族軍の追手もある程度のところで切り上げる。

人族側も少なからず被害を受けたが、明らかに魔族側の方が死傷者は多い。こうして、局地戦の一つに過ぎないものの、今日もまた人族側は勝利を収めたのだった。

### 3

負傷者の収容など、戦いの後始末が進められる中で、カイルは座り込んで休んでいた。ミナギはそのカイルの頬の傷に、血止めの薬を塗っている。

そんな所へ来て文句を言うのはバスケスだ。

「残念だ、逃げられタ。何故追撃させてくれない？」

魔族が退いた際に深追いをしない、という方針を立てたのはカイルだった。別にいる戦闘指揮官も、これを人族側全体の方針として尊重してくれている。

「……これはあくまで防衛戦だからな、追撃するには少し戦線が乱れていた」

カイルもまた、白無の乱入があったせいで、針鼠に止めをさせなかった。

「もう少しで決着がついたのだが……」

多少不満げではあるが、カイルの言っていることを正論と認め、それ以上は追及しないバスケス。言ってみただけという感じなのだろう。

「仕方ないと思うわ。そろそろ日も傾き始めてるし」

薬を塗り終えたミナギもまた、カイルをフォローする。

今回の彼女は、直接戦闘には参加せずに動き回って戦場全体を把握し、指揮官に報告するのが役目だった。彼女のおかげで、人族側は組織だった攻撃が可能になっていった。

「なんだ、倒したのは俺だけか？」

そこへやってきたセランが、空気を読まず自慢げに言う。カイルとバスケスは眉根を寄せるが、文句を口には出さない。

バスケスは戦いそのものを楽しむ傾向が強く、勝利を急がない。今回はそれゆえの時間切れだっ

たのだろう。決着はともかくとして、今回の戦いも十分楽しめたようなので、大きな不満はないようだ。

そしてカイルはいえ、今回はただ倒すのではなく別に目的があり、それが達成できていたのだから不満はなかった。

「上手くいつてよかった」

ほっとしたような声と共に現れたのは、三十半ばの女弓兵で、名前をルクテラと言う。

弓の名手で、先ほどカイルを救った神業ともいふべき矢を放ったのは彼女だ。

「ああ、助かったよ。おかげで厄介な魔族を追い払えた」

カイルが笑顔で答える。

「それにしても、よくもまあぶっつけ本番であんなことやろうと思ったわね」

ルクテラも笑顔ではあるものの、その声には多分に呆れと困惑が混じっていた。

「弓に関しては自信があるけど、まさかあれほどの正確さを要求されるとは思わなかったし……心臓に悪かったわ」

矢の軌道を見せないように、自らの身体で相手の視界を遮っておいで、ギリギリのところで回避して命中させる。口で言えば簡単だが、一瞬でも遅れていれば、鎌はカイルを貫いていただろう。

「ルクテラならできると確信していたからな」

あくまで自信ありげに言うカイルに、ルクテラの方が困惑してしまう。

（まあ、何度かやったことがあったしな）

それ以上は口に出さないが、カイルには確信があった。

カイルが時間を遡ってくる前の魔族との戦争では、これぐらいの**いち**か八かなど日常茶飯事で、むしろそれくらいこなさなければ生き残れなかった。

今回の戦いはまだ余裕があったからこそ、試せるときに試しておきたかったというのもある。

「そう無条件に信頼されると、こっちの方が戸惑うんだけど……ま、信頼に応えられたようで何よりね。こっちとしても、自分と娘の恩人に誤射なんてしたくないから」

そう言って苦笑するルクテラ。

彼女の言う「娘」とは、以前カイルをドラゴン達の住処である世界樹に案内してくれたエリナのことだ。そのときの出会いが病に倒れて困窮していたルクテラを助ける結果に繋がり、彼女は今でもそのことに深く恩義を感じている。

だが、ルクテラの笑顔にカイルの心はチクリと痛む。

前世では、戦友という間柄だったルクテラを、仕方ない状況だったとはいえ見捨てざるを得なかった。彼女に対しては贖罪したいという気持ちに近いものがあるが、それもまた口にはできない。

しかも、彼女が病気にかかったこと自体も、カイルに執着していた人間至上主義を掲げるメーラ教が関わったもので、ある意味自分の事情に巻き込んだようなものだったのだ。

カイルだけが気にしていることと言えなくもないのだが、どうしても頭から離れなかった。

「だけど、あの白い魔族には……」

ルクテラの顔が曇る。何の役にも立てなかったことを悔しがっているようだ。

「ああ、あれは仕方ない。今のところ対抗手段がない。何か手を考えなきゃな」

「剣が通じぬ相手なのだろう？ つまらん」

戦いを楽しめそうにない、とバスケスが興味なさそうに言う。

「それより、最後の一斉射も見事だった。ダークエルフは弓の名手が多いナ」

バスケスの視線の先では、ダークエルフの弓兵達が引き揚げ準備をしている。

周り的一切目を合わそうとせず、役目は終わったとばかりに帰路につこうとしている彼らの様子を、ルクテラは苦笑いで見ている。

「もうちょっと愛想よくしてくれて言ってるんだけどね……一応指揮にはちゃんと従ってくれるんだけど」

「すまないな、厄介な仕事を頼んで」

ダークエルフの弓兵達の指揮をルクテラがとっているのは、カイルたつての頼みによつてだ。

人族の中で最も閉鎖的と言われているダークエルフも、仇敵たる魔族との戦争ということで、さすがに参戦している。

だが、軍という組織に加わる以上は勝手な行動をとられては困る。かといって、普段他の人族と付き合いのないダークエルフが、自主的に連携できるはずもない。

その仲立ちなどかなりの難事であることはカイルにも解っている。しかし、かつてとあるダークエルフと恋に落ちてハーフとなるエリナを生んだルクテラならば、多少はましだろうと考えたのだった。

先ほどの魔族への狙撃は、ルクテラに解りやすい功績を与えれば、少しは一目置かれるのではという思いもあった。

一応彼女の指揮に従っていると聞いて胸をなで下ろしたカイルは、去っていくダークエルフ達の中に一人、見知った顔を見つける。

かつて、やはり世界樹に向かう際に縁があった、ダークエルフの女戦士パセラネだ。

パセラネもまたこちらに気付くと、カイル、次いでルクテラに何か言いたげな微妙な表情を向けた後、仲間の後を追って去っていく。

「……あの子が変わらないわね」

後ろ姿を見送りながら苦笑するルクテラ。

「難しいだろうけど、頼む。ダークエルフ達は貴重な戦力だ」

カイルが頼んでいるのは、戦闘の指揮だけでなく、多種族との橋渡しについてもだ。

「ええ、あの閉鎖性はさすがに行き過ぎているわ」

この戦争を機会に少しでも改善できればいい、そう思っているルクテラだった。

「まあ、あの弓はありがたかったな。あとともうちょいこいつが早く来てくれてれば、完全に勝て

たんだが」

セランが見ているのは、今は活動を停止しているゴーレムの一体だ。

『機将部隊』と名付けられたこのゴーレム達は、強力無比ながらもいくつか欠点があった。

起動するのに時間がかかり、移動も速いとは言えない。また活動できる時間にも制限があったり、色々使いどころが限られる。

もっとも、開発者の魔技師ゴウに言わせれば最大の欠点はデザインらしく、あと一年あれば納得できるものに仕上がるのに、と嘆いていた。無論、他の者に見ればそんな話は知ったことではなかったが。

「戦力としては申し分ないんだ。これ以上望むのは贅沢だろ」

セランの言うことも解るにせよ、カイルにしてみれば十分な出来だった。以前と比べれば。

「さて、とにかく勝つことができた……凱旋（がいせん）というぜ」

戦場でも平時でも変わらない、セランの気楽な声。それにつられるかのようにカイルも腰を上げ、帰路につく。

引き揚げていく兵達を見てみると、負傷した者が多数おり、戦死者の多くは放置されたままだ。優勢ではあるが、決して楽観はできない戦いが続いている——それがこの戦争に対する人族全体としての評価だった。

だが、カイルだけが知っている。かつて自分が体験した魔族の総攻撃、本当の『大侵攻』に比べ

れば、この状況は比べるまでもなく良いことを。

互角以上に戦える現状がどれだけありがたいことか。そして、これも自分が努力してきた結果だと思えば、多少誇らしい気分にもなる。

順調といえる現状だが——しかし、それでも問題は起こるのだった。

## 4

かつて、ジルグス国の最西端、つまり魔族領との境（さかい）にあったリマーゼの街。今その場所にあるのは、対魔族の前線基地の要塞だ。

戦争当初は小規模な砦程度だったが、戦争が進むにつれてその重要度から急ピッチで増築が進められた。そうして惜しみなく資材や人材がつき込まれた結果、今や巨大な城壁に囲まれた要塞——いや、城塞都市と言えるまでの規模になっている。

常に万単位で詰めている兵が休むための宿舎だけでなく、ドワーフの名工が槌を振るって武器防具を造り出す工廠、年単位の籠城を可能にする巨大食料貯蔵庫、馬だけでなく様々な騎乗動物の厩舎、ゴーレムをはじめとする魔道兵器の開発を進める工房に、練兵場などなど。あらゆる施設を備えている、これまでの人族の歴史でもそうそうない巨大軍事施設だ。

無論、兵だけで都市が維持できるはずもないので、多くの民間人も在住していた。

そのため、軍事に必要な施設だけでなく、食堂や酒場などの店が集まった繁華街、娯楽として演劇を披露する小規模な劇場に、兵の心に救いを与える神殿まである。

更に現在も新しい建物が増えつつあるこの地は、いわゆる戦争特需によって人族領の中で今一番発展し、最も景気のいい都市となっていた。

人族領全体から金も物も人も集まる、ここ軍事都市リマーゼ——元あった街からとられた名である——の中心部にあるのは、特殊な喧騒に包まれた街を見下ろせる巨大な司令部。リマーゼにおいて最も重要な施設であり、それに相応しく堅牢強固な建物である。

その最奥にある会議室にいたのは、性別、年齢、種族もバラバラな者達。共通点は、各国の王、またはそれに近い立場として、人族の指導者ともいべき役割を担っていることだ。

これは魔族との戦争が始まって以降、人族軍全体の方針などを決めるべく定期的に行われてきた会議で、メンバーはよほどのことがない限り限りに参加していた。

わざわざ対魔族の最前線であるこのリマーゼに集まる理由は、いくつかある。

前線で戦う諸兵を鼓舞することもさることながら、何より遠国の指導者達にも当事者意識を持たせ、間違ってもこの戦争を対岸の火事などと思わないようにするため——そう、カイルは提言したのだった。

これを可能にしたのは、ガルガン帝国が保持するワイバーンによる飛行輸送だ。他の手段ならひ

と月にかかる行程を、これにより一日に短縮することができた。

この試みは概ね上手くいって、人族全体が常に緊張感を持って魔族と対峙している。

しかし、同時に別の問題を引き起こしてもいた——

今日の会議は、大幅に予定時間を過ぎてもまだ始まっていなかった。

先ほど中規模の侵攻があった影響で、この会議の中心人物の到着が遅れているのが原因だ。

やがて、微かな雑談が響くだけのやや弛緩した空気が流れる部屋に、遅れて堂々としてきた人物があった。比較的年長の者がほとんどの中、全出席者のうち二番目に若いこの男は、迷うことなく彼の指定席に座る。

一応、会議の参加者は全員対等な立場とされるが、それはあくまで建前であり、国力の差で自然と序列のようなものが出来ている。唯一空いていたその席は、最上位者のための上座だ。

彼の名はマイザー、人族最大国家であるガルガン帝国の若き皇帝だ。

もとは第三皇子だった彼は、今から二年ほど前に皇太子の急死から第二皇子との内戦を経て即位したため、当初は統治力を疑問視されていた。

だが、乱れた国内を瞬く間にまとめ上げると、現在では建国帝にして稀代の英傑であった父ベネディクスに勝るとも劣らない評価を受けつつある。

今も、入室と同時に室内を緊張感に満ちた空気へと変えるだけの存在感を持っていた。

「遅れてしまって申し訳ない、所用が立て込んでいて」

謝罪の言葉を述べてはいるが、態度からして謝っているとは言い難い。

自分達が待たされていたというのにこれでは……と、参加者の心中に僅かながら不快感が湧き上がる。

だが、そこは腐つても国の指導者。それを素直に顔に出すような者はおらず、表立った変化はない。そして帝国の皇帝が忙しいのは事実であり、これぐらいの傲慢は許される立場にあるのもまた事実なのだ。

ただ、列席者のうち幾人かは、マイザーが自らの若さゆえに侮られないようわざと尊大に振舞っていると見抜いていた。無論、これも口には出さないが。

「さて始めようか……まず先ほど届いた情報だと、今日の戦闘において魔族を撃退。勝利と言っている内容のようだ」

控えていた従者より、戦闘内容について書かれた書類が各人に配られる。

勝ったという報告にほっとした空気が流れるが、それは大きな喜びというほどではない。魔族との戦争が始まって半年、このぐらいの規模の戦いは既に何度となく繰り返されているからだ。

「死者二百二十、負傷者千八百四十三……開戦当初の激戦ぶりからしてみれば、随分と大人しくなったな」

この発言は、北の軍事国家と言われているタイホン国のシャリダン国王のものであった。彼もま

た即位したばかりで、比較的若い王だ。

シャリダンは父である先王を隠居に追い込んだ男と噂されていたし、タイホン国自体もジルグス国やガルガン帝国といった有力国と険悪な関係になるなど、ここ最近では名声を落としていた。

そのためか、魔族との戦争が始まってからは汚名返上とばかりにタイホン国軍の兵が奮戦しており、今日の戦闘でも見事に先陣を切るなど、軍事国家の面目躍如の活躍だった。

話題に上がった戦闘被害に関しても、シャリダンの言う通り、開戦当初は一日でこの数十倍の規模の戦死、負傷が連日続いた。

早朝から昼までで万の死者が出る激戦もあれば、三日間不眠不休で戦い続ける死闘もあった。そうして、地面は血の色で赤く染まり、死体の山が築き上げられたものだ。

半年続いている魔族との戦争において、現在までの死傷者のうちの七割が最初の半月に集中している。そしてそれらの戦いに人族はかろうじて勝利していた。

「特にゴブリン共半魔族による被害が減っている。こちらが魔族との戦いに慣れてきたというのも大きい……組織だった行動が生きてきたな」

軍事国家の王らしく、報告書を見ながら冷静に分析するシャリダン。

「それに比べて向こうは、相も変わらず雑魚の数に任せた力押しと、魔族個人の戦闘力頼みか……それであの強さなのだから、たまったものではないな……ふん」

ドワーフの国、ギルボールの国王ガラドフ五世が機嫌悪そうに鼻を鳴らす。

地下に広がるギルボール国は、規模としては小さいものの豊富な鉱物資源を有しており、また地理的に戦場に近ことから輸送に適するため、主に物資面で貢献していた。

「数が少ないのが幸いとはいえ、相変わらず純粋な魔族の攻撃はすさまじいな。今日の死傷者にしても、そのほとんどがたった三人の魔族によるものか……」

「だが、今日も勝ったのだろう？　魔族は手強い。しかしそれ以上に我らも団結して打ち勝っている」「確かに、必要以上に恐れるのはよくないのでは？」

その他の出席者が口々に述べていく感想は、概ね楽観的な意見ばかりだった。

それもそのはず、この半年で人族側は多大な犠牲を払いつつも侵攻そのものは防いでおり、連戦連勝。こうした反応もある意味当然と言えた。

「……どうも呑気な意見が多いようだが、魔族はそこまで甘い相手ではない」

そんな空気に水を差すような重い声で発言したのは、エブンの森の長にして、エルフを代表して会議に参加しているリファロだ。

ダークエルフほどではないにしろ、エルフもまた閉鎖的な性格であり、他の人族との交流は最低限しか行わない。だが魔族が相手なら話は別だとばかりに、この戦争には最初から参加し、会議にも積極的に出席していた。

「確かに今は有利と言ってもいい状況だ。だがかつての戦いでも同じようなことがあった。人族側が有利と油断し始めたところで、手痛い反撃を受けたのだ」

長命のエルフには、三百年前の魔族との戦いに参加していた者も多にいる。リファロもその一人で、魔族との戦闘経験は頭一つ抜け出ている。

「……たった一人の魔族に、我が父をはじめとした多くの同胞が討たれた。相手は人族の常識が通じぬ魔族であることを努々忘れないでもらおう」

血の匂いすら連想させるリファロの言葉に、一同が思わず息をのむ。

「そうですね。確かに死傷者の数は減りつつありますが、その分、魔族側の損害も減っています。これは勝利というよりも時間切れの判定勝ちと表現した方がいいでしょう」

冷静にそう発言するのは、この場で一番若く、かつ女性であるジルグス国王女ミレーナだ。

『ジルグスの至宝』と呼ばれるほどの美姫として圧倒的な国内人気を誇り、また高い執務能力や外交センスをも兼ね備え、古い歴史を持つ大国ジルグスを近年更に発展させている才媛である。

先王レモナスが急死して三年が経つが、未だに王位を継がず王女のまま政務の指揮を執っているため、今のところ問題はないとはいえ何らかの深謀遠慮があるのでは、と国内外で噂されていた。

「甘い考えは持たない方がいいでしょう。ここにいる皆さんも、初期の激戦を忘れたわけではないはずです」

「ゆ、油断するつもりはありません。ですが優勢にあるのは間違いない、この機を逃すのは勿体ないのでは」

リファロとミレーナに気圧されながらも、先ほど楽観主義を唱えた列席者達は反論を試みる。

「ただ、戦いが始まって半年、今日のような戦いが増えてきました。魔族どもの出方が少し読めませんな。戦力の逐次投入は愚策、これは魔族も同じはず」

「何かを企んでいると？」

「そうは言っておりません、ただ捕虜の尋問もあまり捗<sup>はかど</sup>っていない。下つ端は何も知らないし、純粋な魔族は倒すのでさえ命がけで、捕縛などとてもとても……」

「情報が足りないか。しかしこのままずるずるといくのは避けたいな……」

「何か手を考えなければな」

「またもや意見が入り乱れ始め、うなり声も上がる。」

勝ってはいるのだが、進展がない。ある意味で膠着<sup>こうちやく</sup>状態に陥っており、人族側として打開策を模索しているところもあった。

「……やはりこちらから魔族領に攻め入るべきでは？」

とある小国の公王が、恐る恐るといった感じで提案する。

数合わせ、とまではいかなくとも国力からすると発言権の小さい立場だが、これだけは言わなければという意志が感じられる言葉だった。

そして今の発言に対し、何かを期待する多くの目が、この場で最も発言力を持つマイザーに向けられた。

「……これは何度も言っていることだが、我々が有利なのは防衛戦だからだ。襲撃に備えて迎え撃つ

ているからこそその勝利であって、攻め入ればそれが崩れる」

渋い顔でそう返したマイザーは、開戦当初から防衛戦の徹底を主張している。

今日の戦闘にしても、柵を作り防御を固め、高所に陣取って矢を撃ち下ろし、伏兵を用意して奇襲するなど、有利な防衛陣地でもって迎え撃っていたのだ。

これは向こうが攻めてくるから採れる手であり、自ら攻めればその前提が崩れることになる。

「魔族とて無限にいるわけではない。このまま侵攻が続けば、疲弊するのは間違いなく向こうだ。」

こういう勝利の仕方もある」

「あくまで有利な立場を捨てず、向こうが疲弊するのを待つ。消極的ではあるが、策としては上々。幸い人族にはまだ十分余裕がある。もうしばらくは我慢比べでいくべきだ」

ガラドフも、現状は決して悪くない、とじわじわ相手の失血死を狙うようなマイザーの戦略を支持する。

「言っていることは解るのですが……」

ガラドフの言葉に苦しい顔を見せる公王。他にも何人かが同じ気持ちになっていた。

確かに、人族の継戦能力にはまだ十分余裕がある。だが、余裕があるのと不満がないというのは必ずしも同じではない。

渋い顔になっているのは比較的国力の低い国の代表者だった。この戦争に必要な戦費は各国の分担制なのだが、彼らは自国分の支払いのために臨時増税を行うなど、早い話が懐<sup>ふところ</sup>が寂しくなりつつ

あるのだ。

だが、そうした窮状を直接口に出すことはない。自分の国に金がないことを晒せば、自ら面子を潰すことになるからである。

ガルガンやジルグスといった大国ならばまだまだ余裕はあるし、余裕のある大国だけでも戦争を続けることはできる。だがもしある国を免除すれば、他の国も当然免除を望むだろう。

一旦そうなれば際限がなくなり、人族全体の結束が崩壊しかねない。現在の有利は、人族がまとまっているからこそであるというのに。

「いや、こちらから打って出るのには私も賛成だ」

覆されそうになった攻勢案に賛成したのは、意外にもリファロだった。

あまり貨幣を使わないので多くを保有しないエルフは、戦費ではなく人員を多めに出し、戦力として十分以上に貢献しているので、決して財政を気にしての発言ではない。

「さっきと言っていることが違うぞ。魔族は危険だと言っていたではないか」

思わずガラドフが口を挟むが、それに対してリファロは小馬鹿にするかのような顔になる。

「危険で警戒すべきだが、臆したわけではない。この状況は魔族が作り出したもの。何かを企んでいる可能性もないわけではない。だからこそ一気に勝負に出るのも、選択肢としては十分ありだ」  
恐ろしいからこそ、有利なうちに、余裕があるうちに決戦に持ち込みたい。リファロはこう言っており、確かに一理あった。

「それに、このままでは兵の士気が心配になってくるな」

シャリダンがまた別の理由から攻勢に賛成する。

人族軍には人族と世界を守るためという大義があり、また拠点となるこの都市は衣食住が高水準なだけでなく娯楽施設まで備わるなど、事前準備の甲斐あってこれ以上ないほど士気が高かった。

しかしそれにも限度はある。

「防衛戦で相手の力を削るのは良策と言える。しかしそれがいつ終わるか解らないというのは、大きな不安要素だ……明確な決着となる、我々の勝利条件が必要だ」

「勝利条件ですか？」

ミレーナの質問にシャリダンが頷き、口を開こうとしたそのとき、ノックの音と共に扉が開いた。

## 5

「途中から失礼します」

会議室に入ってきたのはカイルだった。

現在のカイルの立場は少し微妙で、公的には何の役職も持たず、どの国からも爵位を貰っていない。

しかし『竜殺し』をはじめとする多大な名声があり、また世界会議を提唱して対魔族のために人族をまとめ上げた功績は大きい。

何より、彼が危険を顧みず魔族領に潜入し、実際に攻め込んでくる時と場所の情報を得てきたおかげで、魔族を迎え撃てた（ということになっている）。

そして現在も前線に立ち、剣を振るって魔族と直接戦っていることから、現場の兵達の信頼も厚く、カイルがいなければどうなっていたかと思う者も多い。

そんなカイルゆえこの会議に参加できるのだが、それは自ら意見を出すのではなく、必要に応じて意見を求められる助言者としての意味合いが強かった。

それに毎回必ず参加するわけではないし、今日のように戦闘に参加した後で途中参加することもあった。

無論、王でも何でもいない、ある意味一兵士でしかないカイルへの特別扱いに対し、これ以上の増長を恐れる者や疎む者もいる。

だがマイザーにミレーナ、シャリダンといった上位の首脳陣がカイルの参加を歓迎しているとなれば、内心はともかく誰も反対意見を口にしたりはしない。

ただし、一杯食わされた過去があるガラドフ王や、個人的な事情が原因で気に食わないリファロなどは、露骨に嫌な顔を見せていたが。

「今日も活躍されたようで、本当にありがとうございます」

ミレーナがカイルに笑顔で感謝を述べる。

「自分にできることをしているだけです」

「謙遜なさらないでください、カイル様のご活躍は誰もが認めるところです」

「まったくだ、あなたがいなければ現状どうなっていたとか、想像もしたくないな」

ミレーナに続いてシャリダンも笑いながら会話に加わる。この二人はカイルに直接国の危機を救われているので、特に好意的と言えた。

少し褒められすぎの気もしたため、カイルは話題を逸らすべくマイザーに話しかける。

「それで、今は何の話をしていましたか？」

「兵の話を少しな。このまま長期にわたり士気を維持するためにはどうすべきか……ふむ、士気か……」

ここでマイザーは何かを思い付いたのか、ふと考え込む。

「どうかしましたか？」

「いや、魔族の方だ……純粋な魔族ならともかく、下っ端の半魔族達がよくこんな状況で士気が持つなど」

素朴な疑問を口にするマイザー。

魔族からしてみれば連戦連敗だというのに、末端に至るまで未だに戦意を失っていない。それを改めて不思議に思ったのだ。

「それは簡単ですよ、元々好戦的であり、人族を敵視しているというのもあるでしょうが……魔族にとつて、魔王という存在はそれだけ大きいでしょう」

カイルが言った魔王という言葉に、室内が少し騒めく。

「魔王か……」

マイザーが苦々しい顔になる。穏健派だった魔王に代わって新しく即位した魔王が、この『大侵攻』を引き起こした。つまりはこの戦争の全ての元凶だった。

「魔族にとつての絶対支配者か……では、逆に言えば魔王さえいなければ、士気が保てないということでは？」

シャリダンが身を乗り出すようにして言う。

「さっきは話が途中になってしまったが、明確な勝利条件とはすなわち、魔王を倒すことだと思う」その言葉の内容に、室内の騒めきが大きくなる。

「……確かにその通りだ。現に三百年前の戦いでは魔王を討ち取り、それで戦争が終わったのだから」それを直接見ていたリファロは感慨深げな表情になる。

「だが、それが可能かと言われれば、首を捻るな。相手が半魔族ならば軍勢で、普通の魔族でも鍛え抜かれた精鋭達が犠牲覚悟で挑めば倒せる。だが魔王は……」

魔王を倒す。言葉にすればひと言だが、それがどれほど大変なことか、現在魔族と戦っている彼らには十分理解できていた。

「伝承に出てくるような英雄でもなければ……それこそランドルフでもなければ……あれは本当に強かった。英雄と呼ぶに相応しかった」

三百年前に魔王を討ち取った英雄ランドルフ。今なお語り継がれている、人間にとつては伝説の人物だ。しかし長命なエルフのリファロにとつては、面識のある人物である。

「魔王を倒せるから英雄と呼ばれるのでしよう、そして今の我々にも英雄はいる」

そう言って、シャリダンはカイルに視線を向ける。それにつられるかのように、皆の目がカイルに集まる。

「……期待は嬉しく思いますが、あまり買いかぶらないでください。私に魔王を討てるかどうかは解りません。現に今日も魔族を取り逃がしてしまいましたので」

カイルは頬に残る傷を撫でながら、努めて冷静な声を出す。

「いやいや、カイル殿の実力はよく知っている。あなたなら魔王とて……」

期待の込もった視線がカイルに向けられる。そしてそれはシャリダンからだけではなかった。

「無論、カイル殿だけに任せるつもりはない。その際は露払いに人族の総力を結集することになるでしょう。及ばずながら私も戦場に立ち、共に戦いたいと思っています」

総力戦だ、と力強く言って握りこぶしを作るシャリダンに、多くの参加者が頷いた。

色々々な思惑があるにせよ、魔族を倒したい気持ち、そしてカイルへの期待に、この場の一同の中で違いはなかった。